

ほなひ歴史通信

第117号

2025(令和7).12.1

戦後八〇年を迎える年に

「軍事教練の中で、校庭ではよく前進を行っていたところ、ぬかるみがあったので皆それを避けて進んでいた。そうすると、「貴様ら、戦場でも同じことができると思うのか」と将校から怒鳴り声が飛んできた」。「袋田方面からの軍事教練の帰り道、愛宕町付近を通ると、バリバリとすごい音とともに米軍機の空襲が始まった。皆慌てて近くの民家の軒下などに身をひそめた」。

これらは、私が幼い頃より、祖父からたびたび聞いていた話である。何度も同じ話を聞いていたためか、時には煩わしく思ってしまうこともあったが、自分の孫に話しておきたいという思いがあるのだろうと幼心に感じていた。その祖父も、すでに旅立ってしまい、今ではその話を聞くことができなくなってしまった。平成生まれの私にとって、戦争時代は生まれる前の遠い昔のできごとであったが、その一方で、身近にいた祖父が生きてきた時代でもあった。

今年は、戦後八〇年を迎える年であり、各地で戦争時代を振り返る企画が行われた。太子町においても、九月二十七日の第二回ふるさと歴史講座で、「空襲の時代と太子」という講座を開催した。私自身が講師を務め、私の祖父も経験した太子空襲を中心に、空襲に向かっていく時代の太子町の様相を取り上げた。講座には、

太子空襲について親や祖父母から話を聞いていた方、実際に体験された方などが多数参加しており、改めて戦争時代に対する太子の人々の関心の高さを感じた。また、講座の中で、太子空襲実際に経験した大金一雄氏に当時の体験をお話いただいた。大金氏は私の祖父同様、太子農林学校の生徒として空襲を経験しており、「空襲後に周囲に落ちていた葉菸を拾いにいった人もいた」と私の祖父が語ってくれた話と重なる体験談も聞くことができた。改めて、戦争時代を実際に経験された方の言葉の重みを感じることもとなった。

戦後八〇年を迎える中で、戦争時代を経験された方の多くが九〇歳を越える年齢となってきた。当時の体験を語ることができる人々もごくわずかとなっている。今回の講座では、戦争時代のできごとを家族や周囲から身近に聞いている方々が多く参加していたが、今後を担う若い人たちにとっては、それが当たり前ではなく、歴史の教科書を通じて知るような、遠い過去の時代になつてしまっているのである。

私が勤務する水戸は、昭和二〇年（一九四五）八月二日に大規模空襲を受け、中心市街地の大部分を焼失するとともに、多くの人的被害を生じている。そのため、当時の記録を残そうとする活動が盛んで、水戸空襲前後の体験や戦時下の生活の記録をまとめた『水戸空襲戦災誌』が編まれ、戦争時代の実相を知る貴重な手がかりとなっている。一方、太子町域では、戦争時代の暮らしや太子空襲の体験をまとめた記録はほとんど残っていない。そのため、当時の様子を感じ取ることは、戦争経験者の減少とともに、年々難しくなっている。

私たちが当たり前のように触れてきた、身近な人々の戦争体験をどのように伝えていくべきなのか。祖父と過ごした時間を思い返しながら、考える一年であった。

（藤井達也）

大好き大子町

篠原瑠花

「茨城県大子町」私は、ここでこの春から高校生をしています。

私の出身は東京都の端、東京と信じてもらえないような熊と隣り合わせの田舎、日の出町です。そんな遠くゆかりもないところから、なぜ大子町にやってきて高校生活を送っているのか。それは農業を学びたかったから、そして大子町に惚れたからです。

私の祖父母は、千葉県で農家を営んでいます。私は祖父母が作る野菜や果物が大好きで、好き嫌いなく食べる子供でした。幼少期から農作業のお手伝いをする中で、農業がどんどん楽しくなっていく、農家に淡い夢を抱くようになりました。ですがそこは子供：夢は変わります。中学校の頃にはすっかり通訳ガイドに憧れて、中学校生活を送っていました。しかし、三年生の夏、いざ進路を決める時期になり、私が本当にやってみたいことは何だろうと考えました。そして思い至ったのが農業だったのです。

そこからは必死に農業を学べる高校を探しました。冊子、インターネット、説明会、イベント：最後の最後に辿り着いたのが、大子清流高校でした。いざ大子町に来てみて抱いた第一印象は、安心感でした。私の地元を彷彿とさせる自然の豊かさが一目で気に入りました。学校に見学に行く前から、ここがいいと直感しました。大子清流学校も広い農場で学べる実践的な知識、そして温かくしっかりと見守ってくれる先生方と期待通りでした。また、飲食店やスーパー、AI乗合タクシーなど生活するにも便利で、何よりその日に見た、雨上がりの袋田の滝は、虹とハートの石もあらわれ、息を呑むほどの圧巻の景色でした。見学終了後にどうだったかと問われた私は、すでに大子清流高校にすると心に固く決めていました。

とんとん拍子に受験・入寮と入学準備は進み、今年四月、私は大子清流高校農林科学科の新一年生として新たな一歩を踏み出しました。学校では待ち望んだ農業の実習はもちろんのこと、林業実習や他科目も楽しく学習をしています。部活動では野球部のマネージャーを務め、夏の茨城大会ベスト十六を部の一員として経験することができました。また、寮生活を通して家事や時間管理、人間関係を構築する力を身につけ、仲間と愉快な日々を過ごしています。休日には大子の自然を堪能したり、たくさんイベントやお祭りにボランティアとして参加したり、趣味の水泳をしたり、何より地域の方々がとても親切で優しく、挨拶や世間話をしてくださることがとても嬉しいです。こんな完璧な毎日があるでしょうか？これ以上のことなど到底考えられない、中学校時代の私では想像もできないくらい、全てが充実した毎日です。

一方で、日々暮らして地域と関わらせていただく中で、度々課題を目にします。お祭りなどの担い手が少なかったり、お店が閉店してしまっていたり、大子清流高校も定員を切ってしまったいたり、どれも少子高齢化や人口減少の問題が要因であるように見受けられます。私は大子町に来てまだ半年ちよつとの身ながら、すっかり大子町に惚れ込んでしまいました。こんなにもすばらしい町が廃れてしまうのは、あまりに悲しくもつたないことです。そのため、私は私にできること、例えば地域のイベント・ボランティアに参加したり、地域の友人に大子町の特産品や大子町を熱



お祭りに参加した筆者

弁してアピールしたり、勉強や部活動に励むなどして大子町のこれからに少しでも貢献していきます。そんな私を見守っていただければ幸いです。

最後にひとつ。大子町、大好き！

(大子町浅川在住)

水戸と大子町の二拠点生活

木村公一

私は、現在、水戸市在住だが、月に一度、大子町大沢にある祖父母の家へ通い、主に敷地の草刈りを行っている。祖父母は既に他界しており、空き家となっていることから、那珂市在住の長男である父が毎週末訪れ、家や畑の管理を行っている。敷地の広さは約五千平方メートルであるが、近所の方に畑として利用してもらっているのも、実質的に管理しているのはこの三分の二程度である。また、敷地の南側には大沢川が流れている。

祖父は、久慈郡下小川村（現常陸大宮市）家和楽の出身であり、六人兄弟の三番目であった。祖父が残した日記によると、実家は養蚕や葉タバコ、麦の栽培等で生計を立てており、祖父の父、母、兄、義姉はそれぞれの作業で猫の手も借りたいほど忙しいとの記述が残っている。しかし、当時（昭和十三年）二十二歳の祖父は肺の病気を患っていたことから、家和楽の実家で静養しており、日記に毎日「反省」の内容を書くなど、実家の農作業の手伝いが出来ない後ろめたさが感じられる。病気が回復に向かってきた昭和



炎天下、フル装備での草刈り

十四年に、親戚の紹介で上小川村（当時）の大沢郵便局へ住み込みで就職し、大沢へ移住することとなった。

大子地域では古く平安時代から金が採掘され、祖父が働いていた大沢郵便局の近くの塩沢でも昭和十五年頃から三年ほど大規模に採掘を行っていたようである。大沢川に沿って高さ約六メートルの擁壁を設置し、金を採掘した際の鉱さい（スラグ）を

その擁壁に流し込んで盛土したとのことである。祖父は、盛土され原野となっていた土地を昭和二十九年に購入し、家を建築した。その際に道路沿いに盛ってあった土砂を均して畑としたが、流し込まれた鉱さいは粘土質で水はけが悪く、均した土砂も石が多く含まれており、「畑にするのは苦労した、今も石が出てきて困る」とよく話していたことを記憶している。

父はこの大子の家で育ち、仕事の関係で那珂市へ家を建てたが、ほぼ毎週末、大子の家へ帰っていたことから、私は幼少期よりこの家でよく遊んでいた。敷地南側の大沢川は、水面幅三〜四メートル、深さ三十センチメートル程度であり、祖母とサワガニ探しや河原の石で水切りをしたり、ダムをつくって水を貯めて遊んだりした。他にも祖父や父とのタケノコ採りやサツマイモ掘り、所有する山に登った思い出がある。

空き家となった後は、両親が毎週末訪れて家の空気の入替え、除草、畑などの管理を行っている。私も結婚して子どもが生まれ、月に一度は妻と子どもと共に大子の家を訪れて草刈り等、家の管理の手伝いを行っている。草の伸びるスピードは予想以上に早く、春から秋はいつも草刈りをしている状態だが、私は「着工前」、「完成」と仕事の成果がすぐに分かる草刈りは嫌いではない。子ども達には、ジャガイモやサツマイモの植え付け、収穫を体験させたり、川遊びをさせたりしている。月に一度は両親に孫の顔をみせることができるので、親孝行になっているものと思っている。

せっかくの「別荘」なので、妹家族や友達とバーベキュー、大子広域公園のプールや近くの日帰り温泉に行き食事するなどしている。他にも学生時代のテニス仲間やゴルフ仲間との合宿にも使っている。

今は草刈りで精一杯だが、いずれは畑に暗渠排水を施工するなど、祖父が晩年まで気にしていた畑の土壌改良をやってみたいと考えてながら草刈りに精を出している。

（水戸市在住）

『図説 茨城の城郭 4』を刊行しました

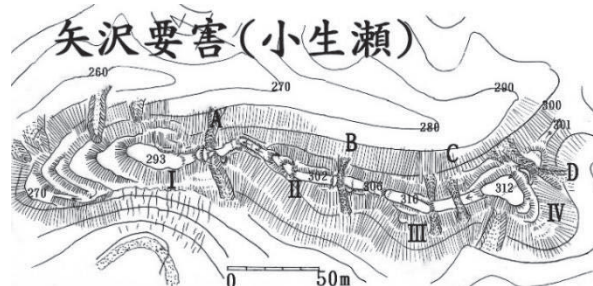
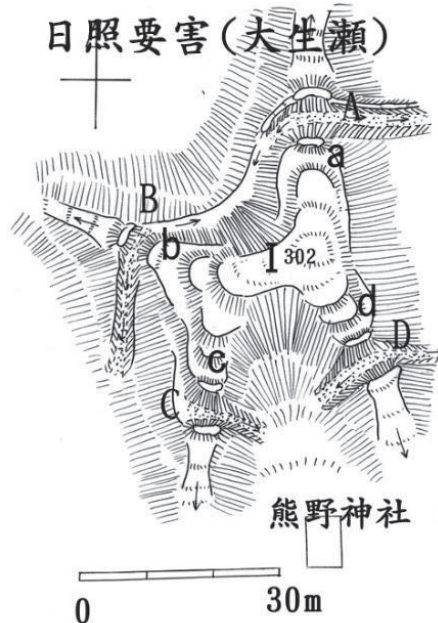
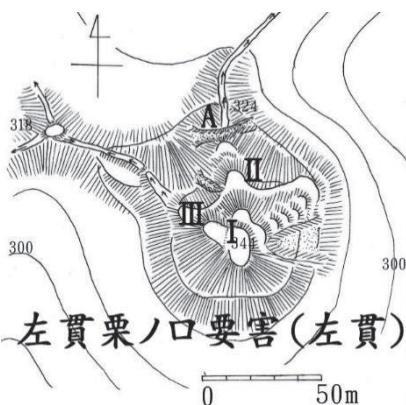
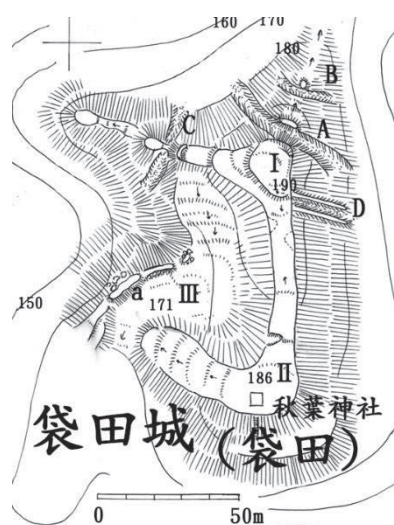
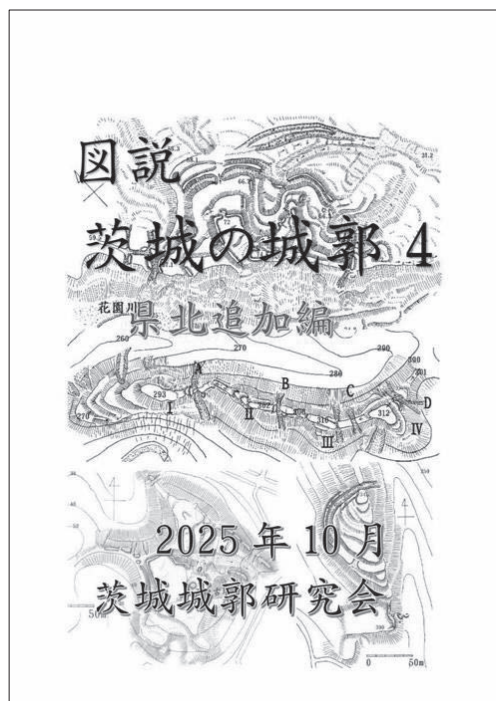
青木義一

茨城城郭研究会は既刊の『図説 茨城の城郭』シリーズ全三巻で、大子町の城を四十一城紹介しています。そして、今年十月に新たに『図説 茨城の城郭 4』を刊行しました。ここではさらに十七城の大子町の城を紹介しています。計五十八城の城がこの大子町にあるのです。これは従来知られていた城の数の三倍以上に当たります。

これだけの城があるのは、大子町（中世の依上保）が常陸、下野と奥州の境目に位置し、八溝の金を巡って佐竹氏と白河結城氏が激しい争奪戦を演じたことがあるのでしょう。でも、この争奪戦に関わる史料はあまりなく、一体どんな戦いが繰り広げられたか分かりません。しかし、発見された城を調べると、史料には書かれていない隠れた歴史を城は雄弁に語ってくれます。

史料には登場するが場所が分からなかった、いわゆる「迷子の城」である矢

沢要害、袋田城が見つかりました。左貫は城が五つも存在する城郭密集地だといことが見えってきました。矢田城は遺構が東にも展開し、大子最大級の城といことが分か



りました。これらは何を意味するのでしょうか？
本書は茨城県立歴史館、常陸太田市郷土資料館にて一〇〇〇円で販売しています。皆さまも戦国の昔、大子で何が起きていたのか思いを巡らしてみませんか？
(茨城城郭研究会)

額田城跡の発掘調査

飯島一生

額田城跡は那珂市北部（額田地区）標高二五メートルほどの台地上に所在する額田小野崎氏の居城です。北側に久慈川、南側には有ヶ池（現在は水田）を有する要害の地となっており、県内でも最大規模の連郭式平山城です。主要部の一ノ曲輪、二ノ曲輪、三ノ曲輪の外側にも土塁や堀があり、これらに町が囲まれるような構造（総構え）となっています。

城は、十三世紀中頃に佐竹氏五代義重の子、義直が額田を領して築城したとされ、その後の山入の乱を経て佐竹家臣の小野崎氏の居城となりました（額田小野崎氏）。戦国時代末期、一五九一（天正十九）年に額田小野崎氏七代昭通は、豊臣政権の支援を受けた佐竹氏から攻撃され、城は落城してしまいました。

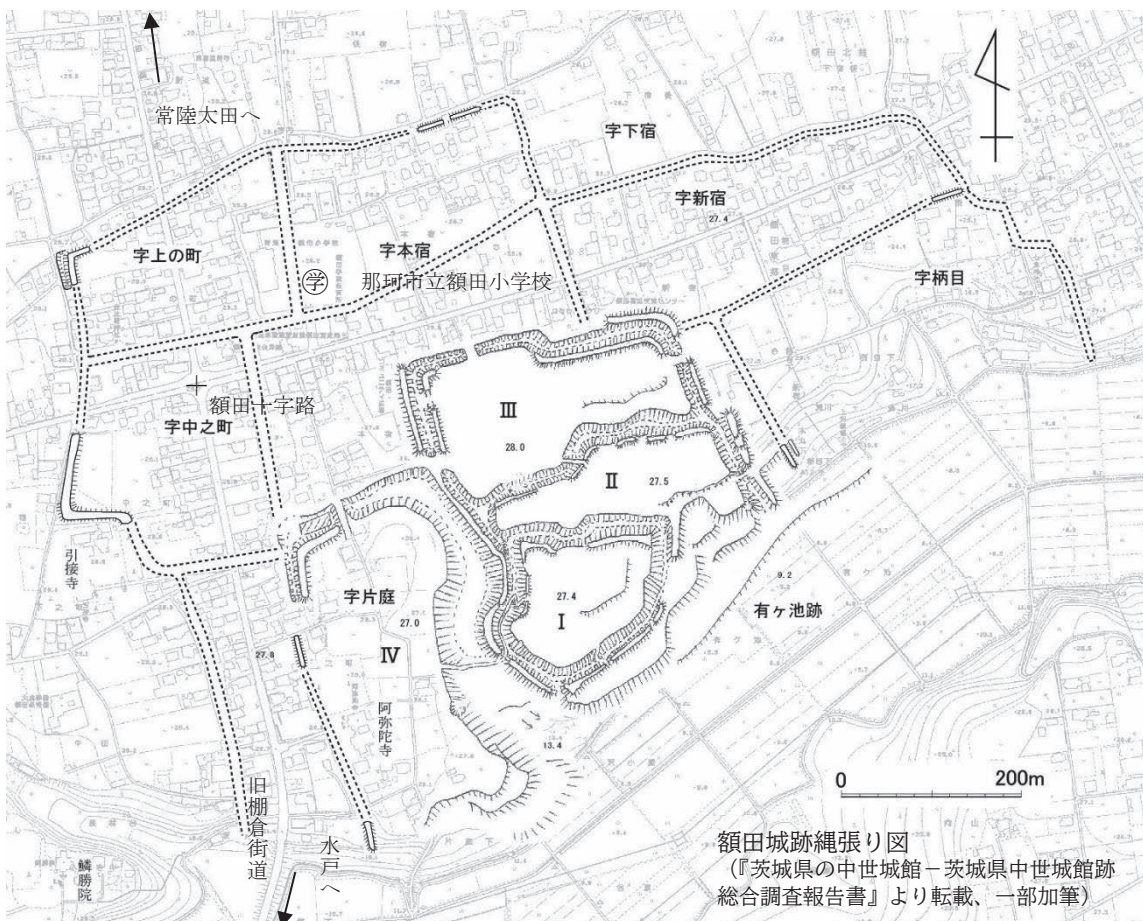
廃城後も一ノ曲輪、二ノ曲輪、三ノ曲輪が大きな堀、土塁によって区画される城跡は、地域の人々によって歴史を語るシンボルとして保存されてきました。一九九八（平成十）年、旧那珂町は城の一ノ曲輪、二ノ曲輪及びそれらを取り囲む堀跡、土塁跡を町民の貴重な財産であるとして「史跡」に指定しました。

その後、那珂市は額田城跡保存管理計画の策定や土地の公有化を図りながら、額田城跡保存会や額田地区まちづくり委員会とも連携し、その保存に努めてきました。

今回実施する発掘調査は、額田城跡を貴重な地域の文化財として未来へ継承するために額田城の基礎資料（規模、構造、時期等）の蒐集を図ることと、それらの資料をもとに史跡範囲の再検討を進めることを目的としています。

現在、城の大きさは東西約一〇七〇メートル、南北約八二五メートルとされていますが調査によってさらに広がる可能性もあります。また、埋没している堀や建物跡、さらには当時の日用品などの発見が

あれば四〇〇年前の城の威容や人々の生活が見えてくるかもしれません。まずは一月から一ノ曲輪を調査します。調査の様子は、市のホームページなどで随時公開していく予定です。多くの皆様にご視聴いただければ幸いです。（那珂市教育委員会生涯学習課）



下金沢十二所神社・流鏑馬復活への道(二)

吉成英男

実家に戻ってから、若い頃に見た流鏑馬の記憶が鮮明にありました。的の取り合いをして、肋骨を骨折したこともあります。

流鏑馬は五年ごとに行われますが、昭和五十七年以前は二十三年間のブランクがありました。昭和五十七年から平成九年までは四回続いたのですが、また途絶えてしまいました。

その理由としては、高齢化もありますが、当時、御出社は当番制で当屋(とうや)と言い、そのトップの本当屋(ほんとうや)が取り仕切っていました。本当屋が、流鏑馬を行うかどうか、当屋の人たちに諮るのですが、本当屋がやる気にならなければ、当屋の人たちもやりましようとはなりません。本当屋が当屋の人たちに諮ったこともあったのですが、当屋の人たちが「大変だから」と言って、ダメになったこともありましたが、流鏑馬は、当屋がまとまらなければできません。総代長でも決められないのです。当屋は、四区ある坪から二名づつ選ばれて一年交替です。今は、高齢者が多くなり、若者も面倒くさいと言って、やりたがりません。



馬上から矢を放つ射手(祭礼当日撮影)

そこで、令和五年度の氏子会総会で、当屋制を廃止して、祭り一切の取り仕切りを総代がやることにしました。これは、御出社と流鏑馬奉納の権限を当屋から総代に委任することでもあり、当屋が回ってきて氏子を辞める人を減らすことにも大きな効果がありました。

今回のお祭りでは、地域の人たちや今は他所にいる人たちが、一緒に

顔を合わせる機会になりました。これをきっかけに、地域の繋がりや親睦が深まってほしい、見たことのない若い人や子どもたちに見せてやりたい、そして繋いでいってほしいという思いでした。

同じ流鏑馬でも、例えば、鹿島神宮の流鏑馬は参道が広いですが、うちは参道が狭いので、土煙をあげながら、射手が進んできたときのスピード感や迫力が違ったと思います。

このように、今回は本格的な流鏑馬でしたが、昔は、「口どり」と言って、介添人が二人いて、馬は介添人の走る速度に合わせて進んでいました。射手は、来年の当屋(来当・らいとう)の中から選出されました。馬は、以前は他所から借りてきてやっていましたが、もつと昔は地元で飼っていた馬を使っていました。ただし、他所から馬を借りるにしても、馬に餌をやったりして、手なずけるのが大変です。介添人も慣れていません。

実は、流鏑馬を行うのが決まったのは、今年の二月二日でした。馬をどうするかで、借りるのは大変だし、どうしようかと思案していたところ、たまたま、古殿町の流鏑馬のことを知り、昨年の十一月に、古殿町の保存会に打診しました。保存会の方でも、町外ではやったことがなく、かなり議論があったようで、こちらから催促しても、なかなか結論が出ませんでした。ようやく返事が来たのは一月二十八日でした。

早速、二月二日に、氏子総代と氏子役員の六名で流鏑馬奉納を決めました。二月九日には、第一回の執行委員会を開催し、有志のほか、区長にも集まってもらい、「氏子以外にも協力してほしい、やりましょう」と頼み込みました。それからは、猛ダッシュでした。執行委員会は、十二、十三回はやりました。

中心メンバーは無事に終えることができ、今は疲れ果てて抜け殻になったようです。少人数で馬場の準備等もしましたが、仕事をリタイアした人や先輩方の働きぶりにも助けられました。(続)

(太子町下金沢在住)

戦時下、三井報恩会の支援と黒澤村（下）

—「いはらき」新聞に見る戦争時代の天子（11）—

齋藤典生

昭和九年（一九三四）、財閥批判への対応策として三井財閥は三井報恩会（以下「報恩会」と略）を創設した。その報恩会から指定を受けた黒澤村が、金銭的、さらには人的支援を受けながら、一五年（一九四〇）六月に発足した黒澤村振興会（以下「振興会」と略）を軸に多様な振興事業を展開し始めたことは本誌前号でふれた。

二年目に当たる昭和一六年度は九一八八円の助成のもとで、前年度からの継続事業の他に村民の医療費軽減のための医療用ダクトサン自動車購入、栄養改善をねらった山羊の飼養普及等が新規事業として取り組まれた。また三年目の一七年度は、七五〇六円の助成金を得て一五年度来の事業を継続、発展させた。一連の振興事業の成果について、報恩会は「村常会、部落常会、各実践班の活動と相俟ちて漸次更生の機運に向ひつゝあり」（『事業報告 昭和十七年度』）、と総括している。

これら振興事業の様子は、茨城新聞紙上でもしばしば紹介された。昭和一六年の取り組み例を挙げると、振興会は代用食パン製造講習会を六日間開催している。その目的は「今後パン釜を国民学校内に特設して児童、女子青年、一般にも代用食パン製造を習得せしめて節米に嬉しい協力を」させることであり、「本県唯一の三井報恩会指定村としての新興農村建設に一役買つて出たわけ」（昭和一六年四月一八日付）だ、と報じた。

茨城県は、国民に浸透している「自我功利の観念を一掃し国家奉仕を第一義とする国民精神を昂揚具現」する目的で、昭和九年度から教化市町村運動を展開し、黒澤村を「教化町村」に指定していた（一七年六月二四日付）。それもあって、振興会はとくに「教

化村」建設に一段と力を入れ、一七年から毎年八月に「夏季修養道場」を開催している。一回目では農業講座、教育講座、修養講座、軍事講演等が三百名の村民を対象に三日間開かれ、「地方稀に見る盛況振り」と伝えられた（一七年八月三一日付）。また、敗戦一年前の一九年八月には、「食糧増産に手不足を物ともせず奮闘する村民の戦局と共に行く忍苦の決戦生活を切り抜いてゆく逞しい剛健な心身を鍛へ上げる目的で」、三回目の「夏季修養道場」が全村民を対象に二日間開かれた（一九年八月一五日付）。時勢に沿ったこうした一連の教化策に対して、茨城新聞は、「決戦下の真姿農村を建設する県下唯一のこの教化村は闘ふ農村構成を着実に築き上げて先づ農民の伝統魂をしつかりと把握することに成功したといひ得る」（一九年八月三〇日付）、と評価した。

昭和一九年には、さらにユニークな二つの方策が立案された。一つは、農民体操の実践である。「健全なる自治体は先づ農民の健康から、健康なき農村に戦力はない」「増産は先づ健康から」との旗印を掲げ、実践班や隣組を通じて農民体操を全村に浸透させようとした。農民体操とはどのようなもので、村民各層にどう受け入れられたのかは不明だが、「全国農村に魁けて初めての試み」と位置づけられている（一九年一〇月一六日付）。もう一つは、「県下にも珍らしい農村読書会」である。「農業経営と繋がる思想教育が何より重大な問題だ」との認識のもと実践班単位に読書班を設け、輪読会や座談会を開催するとした。それに合わせて振興会は、愛読すべき時局、社会、思想、文化、宗教、増産技術等に関する新刊書の購入予算千二百円を計上している（一九年一〇月二〇日付）。かくして、報恩会の支援を受けた黒澤村の振興事業は五年間に及んだ。様々な分野で展開した諸事業は、県の指定教化村としての矜持とも相俟って、広範な村民を戦時体制に巻き込んでいっただけでなく、その過程で、村民もまた「聖戦」を信じ、戦時体制の意欲的な担い手になっていったものと思われる。（水戸市在住）

懐かしき昭和の天子（五）



○ホテル奥久慈（昭和四十一年頃）

ホテル奥久慈は、全国共済農業協同組合連合会の保養施設として、昭和四十一年（一九六六）七月、天子町池田に開業した。客室数は四十七で、最大約二百人を収容することができた。奥久慈グランドホテルと並んで天子温泉を代表するホテルだった。最盛期の昭和五十四年には、宿泊客だけで三万人を超え、日帰り客や結婚式場利用者を合わせると、約四万八千人に達した。しかし、バブル崩壊後の不況等により、平成十七年（二〇〇五）には、宿泊客が一万八千人にまで減少し、日帰り客や結婚式場利用者を合わせても三万人を下回った。利用者数の低迷に加えて、建物の老朽化も重なり、平成十九年一月に閉館した。その後、伊東園ホテルグループを運営する株式会社スタディが建物を取得し、客室を増築の上、ホテル奥久慈館を開業し、現在に至る。（大金祐介）

天子町歴史資料調査研究会では、明治・大正・昭和期の写真や絵葉書を探しております。お見せいただける方は、天子町教育委員会事務局生涯学習担当までご連絡ください。

編集 天子町歴史資料調査研究会

編集人 藤井 達也（天子町歴史資料調査研究員）

大金 祐介（天子町歴史資料調査研究員）

小松崎 研（天子町歴史資料調査研究員）

山崎 仙一（天子町教育委員会事務局）

大金真理子（天子町教育委員会事務局）

発行 天子町教育委員会

久慈郡天子町大字池田二六六九番地

☎ 0295（72）1148

発行日 二〇二五年（令和七）十二月一日